

## あ と が き

本書は、「ネオ・リベラリズムの進展とアジア化するオーストラリア社会に関する人文地理学的研究」2012～15年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術)(代表者:堤 純, 課題番号:24401036)(以下, ネオ・リベラリズム科研)による研究成果を骨子とし, 以下に示す他のいくつかの別テーマの科学研究費プロジェクトの成果を統合したものである。執筆者のうち, 堤, 吉田, 葉, 筒井, 松井の5名はネオ・リベラリズム科研のメンバーである。4年間の研究期間中に, メンバーのほとんどが集まる1週間程度の合宿調査をメルボルン(2012年), パース(2013年), アデレード(2014年), シドニー・キャンベラ(2015年)において実施した。

合宿調査ではキッチン付きのコンドミニウムを借り, そこをベースキャンプとして現地調査を進めた。毎日の食事当番を決めておき, その日の食事当番がメンバー全員の夕食を準備する。残りのメンバーは宿に戻ってくれば食事ができており, その食事を皆でとりながらその日の調査結果を報告し合い, 知識を無理なくシェアする。論文として成果を公表できた内容は, そんな日々の報告の中のほんの一握りにすぎないが, 毎日数時間もかけて共有した現地調査の収穫は, メンバー全員にとってかけがえのない財産になっている。

こうした, キッチン付き, 家具付きの宿泊施設というのは, オーストラリアでは一般的によく見かけるものである。大都市部はもちろん, 保養地しかり, そして道路沿いのちょっとした中継地点となる小さな観光地でも, “Full kitchen”と書いてあれば, 通常では4～5人分の食器一式とガスコンロ(または電気式コンロ), オープンや鍋・釜・包丁のレベルまで調理道具がすべて揃った宿泊施設であり, 施設の数も多い。夕食を準備しながら, メンバーの間でその日の調査結果や疑問点や“What’s new”を気軽に話し, 日頃と変わらずソファでくつろいだり, フィールドノートを整理したり, リラックスした雰囲気です食事を囲んだり……。その日のフィールド調査のできごとを, まるで家族のように皆で話し合う。オーストラリア人が大好きなバーベキューを囲むのと同じように, 気心知れたメンバーとともに過ごした合宿調査から, 本書は生まれた

といっても過言ではないだろう。

こうしたオージースタイルの情報シェアリングが功を奏した場面があった。それは、本書の成果の一部を日本地理学会の口頭発表において、グループでいくつかの発表を連続して行った時のことである。口頭発表を予定していたメンバーの1人が急用のため発表当日の都合がつかなくなった際に、研究代表者の私が急遽ピンチヒッターとして口頭発表を担当した。現地調査そのものは1人のメンバーが中心に行ったものであったが、発表を担当した私にとっても、合宿調査時に食事をしながら聞いていたさまざまな情報の蓄積があるため、発表と質疑応答をそつなくこなすことができた。

ところで、本書の執筆者の中には、ネオ・リベラリズム科研の分担者ではないメンバーも含まれる。執筆者のうち大呂さんと阿部さんの2名は、全国学会などを通じてオーストラリア研究に対するさまざまなアイデアをネオ・リベラリズム科研のメンバーとも相談してきたつながりから、本書に寄稿することになった。阿部さんによるシドニー郊外のエスニックコミュニティの論考、大呂さんによる *wagyu* のコラムは、本書の「旨み」を増す、かかせないスパイスでもある。また近いうちに、大呂さんと阿部さんも加わった研究プロジェクトを企画して、オージースタイルの合宿調査を行いたいと切に希望している。

本書の各章は、III章とIX章を除き、既発表論文を修正・加筆のうえで集成したものである。各章と既発表論文との関係は次の通りである。

I章：堤 純・吉田道代・葉 倩瑋・筒井由起乃・松井圭介 (2015)：センサデータからみたオーストラリアにおける多文化社会の形成。地理空間 8, pp. 81-89.

II章：堤 純 (2013)：シドニーとメルボルンにおける都市社会の多様性—地理情報システム (GIS) を用いた分析の可能性—。オーストラリア研究, 26, pp. 37-48.

堤 純 (2014)：使用言語からみた社会経済特性の差異—大都市シドニーのジェントリフィケーション—。統計 (日本統計協会), 65 (6), pp. 42-45.

III章：書き下ろし。

IV章：堤 純 (2012)：メルボルン大都市圏における通勤特性—オーストラ

リア国勢調査「テーブルビルダー」データを利用して一. 統計(日本統計協会), 63(2), pp. 19-25.

V章: 堤 純, オコナー・ケヴィン(2008): 留学生の急増からみたメルボルン市の変容. 人文地理, 60, pp. 323-340.

Tsutsumi, J. and O'Connor, K. (2011): International Students as an Influence on Residential Change: A Case Study of the City of Melbourne. *Geographical Review of Japan Series B* 84(1), pp. 16-26.

VI章: 吉田道代・葉 倩瑋・筒井由起乃・松井圭介・堤 純(2015): シドニー・ライカートにおけるイタリア系コミュニティの拠点再構築の試み. 地理空間 8, pp. 91-102.

VII章: 葉 倩瑋・筒井由起乃・松井圭介・堤 純・吉田道代(2015): キャンベラにおける華人社会の空間構造. 地理空間 8, pp. 103-115.

VIII章: 筒井由起乃・松井圭介・堤 純・吉田道代・葉 倩瑋(2015): 南オーストラリア州アデレードにおけるベトナム系住民の分布とその特徴. 地理空間 8, pp. 117-129.

IX章: 書き下ろし.

また、前述のネオ・リベラリズム科研以外にも、これまでにたくさんの研究助成をいただいたことにも謝意を述べたい。本書のIII章の執筆には「オーストラリア型多文化主義の変容と移民エスニック空間の形成に関する研究」2014～17年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(A)(代表者:阿部亮吾, 課題番号:26704010)の一部を、また本書のV章の執筆には「オーストラリアにおけるアジア系留学生の急増と都市グローバル化へのインパクト」2006～08年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(B)(代表者:堤 純, 課題番号:18720229)の一部, および「コンド・プームの進展とジェントリフィケーションの多様化に関する研究」2009～11年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(B)(代表者:堤 純, 課題番号:21720301)の一部を使用した。

さらに、本書を執筆するに当たり、現地調査では実に多くの方々から多大な協力をいただきました。メルボルン大学のKevin O'Connor名誉教授, 同大のRay Wyatt准教授をはじめ、多くのオーストラリア現地の研究者からは建設

的で示唆に富むご教示を得ました。加えて、現地の州政府や市役所の方々からは貴重なデータを存分に提供していただいたほか、VI章のライカートの現地調査では、ライカート市役所およびライカート市立図書館の職員の方々、Co.As.It. 職員の方々にも聞き取りにご協力いただき、自治体国際化協会（CLAIR）シドニー事務所の職員の方々にも仲介の労をとっていただきました。VII章のキャンベラでの現地調査では、ACT Chinese Australian Association 会長の Chin Wong 氏ならびに Department of Social Services の Joanne Constantinides 氏に大変お世話になりました。VIII章のアデレードでの現地調査では、南オーストラリアベトナム人会長の Loc 夫妻をはじめ、調査に快くご協力くださった方々に心より感謝いたします。末筆ながら上記して感謝申し上げます。

2018年3月吉日 執筆者を代表して 堤 純